

旧オルト住宅

この大きな住宅はイギリスの商人であるウィリアム・オルト（1840-1908）によって建てられ、その建築は 1865 年に開始した。ウィリアム・オルトは茶葉とその他の商品の貿易で富を築いた。1864 年に彼はウェルズリー州（現在のマレーシア・ペナン）の行政長官の娘のエリザベス・アール（1847-1923）と結婚した。彼の豪華な住宅は長崎の外国人居留地の中でも最も大きなものの一つであり、Verandah（ベランダ）、Entrance（出入口）、Drawing Room（応接間）、Dressing Room（居間）、Bedroom（寝室、4 室）、Bath（浴室、4 室）などからなる。厨房とメイド部屋は住宅の背後のレンガ造りの別棟にある。そしてウィリアム・オルトは、今日もこの住宅の前に建設当初のまま立っているイタリア式の噴水までをも備え付けた。

しかし 1868 年、ウィリアム・オルトとその家族は長崎を後にし、住宅はさまざまな人や組織の手に渡った。活水女学校校舎やアメリカ領事館の手に順番に渡り、リンガー一家が 1903 年に再度取得した。リンガー家は日本が 1941 年 12 月に第 2 次世界大戦に正式に参戦するまでここで暮らした。1943 年には川南工業が住宅を購入した。第 2 次世界大戦終了後の連合軍による占領中はアメリカ軍によって接收されていたが、1950 年代初めに川南工業に返還された。そしてある期間放置されたのち、長崎市が 1970 年に購入した。1972 年には日本政府によって国の重要文化財に指定された。

建築の特徴

長崎の外国人居留地にある西洋式の住宅のほとんどは日本の大工によって建てられた。構造的にそれらはイギリス植民地時代のインドの平屋建て住宅を思わせるが、日本のデザイン的特徴も持ち合わせている。例えば、旧オルト住宅は、熊本県天草出身の大工である小山秀之進（1828-1898）によって建てられた。この住宅は日本の流行に沿って建てられたものの、設計書は西洋式のもので建てられた。1863 年の設計図には、部屋の名前は英語と日本語の両方で書かれており、長さに関する表記もヤード・ポンド法と尺貫法の両方で記されている。住宅の外壁とベランダのトスカーナ風列柱は天草の砂岩でできており、屋根は桧瓦葺で覆われている。